

---

# 白馬義従 -隊と共に、貴方の傍へ-

くおん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白馬義従 - 隊と共に、貴方の傍へ -

### 【Nコード】

N5231T

### 【作者名】

くおん

### 【あらすじ】

初投稿作品です！幽州に仕える 名を郭礼 字が笙 が白蓮を助けながら、自ら鍛えた部隊【伏馬隊】と共に乱世を駆け抜けるというものです。至らないところがあると思いますがよろしく願います。旧タイトル「恋姫無双―練習作品」 活動報告に報告あり。

## 第一話 客将ですね（前書き）

初投稿となります、よろしくお願いします！

## 第一話 客将ですな

どうも初めまして、伯珪様の配下で郭礼と申します。まあ兵の指導や指揮が中心の文官？ですね。今は直属の隊である伏馬隊の訓練をしています。

伏馬隊とは私が直々に鍛えている部隊で一応伯珪様の軍中では最も精強な舞台です。

基本的に走り込み、打ち込み、組手、模擬戦が訓練内容ですね。

あっ、打ち込みとは地面に挿した木の棒を打ち付ける訓練ですよ？これをしないと甲冑を着た相手を斬る際に生じる衝撃で腕が持たなくなりますからね。

最近は賊が多くなってきたところですし、表に出して実地訓練をさせなければとは思っているんですがなかなか時期があわず、ずっと訓練訓練です。

と、思想にふけていると走り込みが終わっていたようでした。次は・・・

「全隊やめっ！続いて打ち込み始「笙！ちょっと来てくれ」っ、全隊休め、しばし休憩とします。」

『ハッ』

「副隊長は休憩終わり次第、皆に指示して打ち込みを頼みます。さて、伯珪様なにかございましたか？」

「実は客将をしたいというやつがいるんだが、判断が難しいから手伝ってもらおうとおもってな」

と、伯珪様と私。ふむ、客将か。ここに武将はいないのがな、私は軍師だからうごくに動けんからな

「私もお会いします、一応これでも軍事の最高責任者ですからね」  
「実力で勝ち取ったくせに何言つてのさ、とりあえず来てくれ」  
「ハッ」

伯珪様が決めきれなかったのは、ちょっと疑うな。優秀ではあるが何か条件があつたとかか？まあ気にしてもしょうがないか。

~~~~~

「これはこれは、かの有名な【幽州の戦匠】がお越しくださるとは歓迎の極み！某は仕えるに値する主を探す旅に出ている名を超雲、字は子龍と申します、以後お見知りおきを。」

これは、なんというか、凄いのきたな。

「（あー、伯珪さま？この人ですか？違いますよね？私あんな扱いづらそうな人を部下にもちたくないのですが）」

「（伏馬隊ではないが軍で試しに模擬戦させたら、優秀であることがわかったんだけど迷っちゃってさ、お願い笙！きめてくれっ）」

と、伯珪様がのたまってくれた。どうしろってんだ！貴方、太守でしよう！？

「（はあ）常山の昇り龍さんが何故ここに？正直ここは平凡「おい！？」が人しかいないとこですよ？」

「！？ ふふ、貴方は平凡ではないでしょう？軍の新兵を使つて元将軍たちの兵を悉く打ち負かし、軍師の座まで昇りついたとお聞きますが？」

なんか、突込みが入りましたが結構広まってるんですね。

まあおかげで將軍やめてしまつて負担がすごいですがね！。

訓練・兵站・編成・募集など軍事のつく全ての雑事が私の仕事です。いやはや、やりすぎてだめですね！。

とまあ、思いふけるのはこれまでにして客将か。黄巾党も気になるところだし、そろそろ呼び出しもかかるでしょうから指揮できる人は一人でもつてところですかね。

「伯珪様、客将としてお願いいたしますよう。これから・・・いえ、もうすぐに呼び出しがあると思います。私は直隊のほうで指揮に専念できるようになれば死傷者も減るでしょうからね。この通り客将の申し出を受けてくださいますよう伏してお願ひしたく。」

そうして、私は右ひざを床につける。同時に後ろからも音が、きつと趙雲殿が片膝をつけたのでしょう。

「分かった、趙雲よろしくたのむ。笙は話があるので残ってくれ、趙雲は一度・・・西の練習場へいってくれ。さきにいておくが東の棟には近づかないように。」  
「御意、では失礼いたします。」

と、超雲殿が出ていくと、

「笙、呼び出しって一体？」

「黄巾党のことですよ、幽州のはずれでも被害が立て続いておりますが、正式に中央から討伐令が出るでしょうね。」

そう呼び出しとは討伐令のことです。実際現状が現状だけに断わ

るわけにもいかないですからね。そして、

「今回の呼び出しですが、伯珪様は州の守りをお願いしてもよろしいでしょうか？歩兵を中心に軍編成を行い趙雲殿を将としたいと考えています。そして伏馬隊は私が指揮いたします。敵将の首を挙げて幽州の名を広めてきたいと考えているのですよ。」

そのためにも一般軍の指揮まではやってられない、軍師が直々に遠征つてのもだめな気がしますかね。

「騎兵はいいのか？」

「まだアレは見せるときではないでしょうか？それに伯珪様を守りにということなら騎兵をここに置いていくのが一番良いと考えたのです。」

「それもそうだな！では、この方向で案件はまとめておくよ。笙は伏馬隊の最終調整を、趙雲には私から指示を出しておくから。」

「御意、我が主。」

こうして郭礼が率いる伏馬隊は乱世に踏み出した。

## 第一話 客将ですね（後書き）

実際かいてみると、難しいですね。何故みなさん・・・あんなに上手にかけているんだろう・・・泣けてきますね。  
タイトルですが、未だに固まっています（汗  
今週までには決めたい・・・

5 / 3 1 修正

設定集 5 / 3 1 追加（前書き）

郭：説明ながいですね 駄作者が。

作：ごめんなさい！やりすぎ感半端ないです……。。

郭：まあ読まなくても大丈夫ですから問題ないのしょうか？

作：問題……。ないよ？

郭：……。。

まあ問題ないと思います！

## 設定集 5 / 3 1 追加

作者が忘れないようにとかそういうことないよ！たぶん・・・

「性」 郭

「名」 礼

「字」 笙

「真名」 壹夜

基本的に戦術家と開発家といったタイプで、政務は苦手としている（一応こなせるがやりたくない）。

普段は早朝から昼にかけて政務を、昼から西の一般練武場にて兵の訓練。夕方に伏馬隊に確認しにいくといった流れ。

伯珪様に政務の頼みに振り回されながら、各国の情報収集のため日夜遁走している。

先にいっておくと隊がチートです！

武器は棒。

「性」 法

「名」 櫨

「字」 廉達

「真名」 眞吏

爺さんハアハア。伏馬隊隊長兼、郭礼の政務補佐

真名が女性名ばかりで真名で呼ばれることを嫌う。どちらかといえば普段は爺とか爺様とか呼んでほしいと周りに伝えていたり・・・

元將軍で郭礼の指揮捌きに感銘を受け配下に、そして今は三百人将「伏馬隊」の隊長を務めている。

冷静沈着で目標は郭礼の読みを超えること。武器は剣。

ここから訓練などの設定

打ち込み：地面に挿した木の棒に切りつける、板に槍を突きつけるなどを絶え間なく行う訓練法。実際の戦では人を斬る・突く行為は腕に負担がかかるというものもあるが、刀のように切り裂くではなく、剣はにじり切るといったもので負担が大きい。 出典：中世欧州のペルという訓練

走り込み：甲冑重いですよね、特に三国はより防護を主点とした甲冑が多く重かったとされています。伏馬隊は軽装仕様です。てことで、体力作りってわけですね。まあ兵も全員が兵士とかそういうこととはなく、農民が徴集されることも多々あるので一概に重装備ってわけじゃありませんが。

統合部隊：伏馬隊の基本となります。弓弩隊・騎馬隊・歩兵が一丸となって行動するもの。この時代最も攻撃性があったのは弓弩です。弩の場合は射程150m前後、長弓は100m、短弓で50m前後（ここらへん差異あります。）なので、まずは弓弩隊が射ち、歩兵はその前で槍袈を仕掛ける。そして騎馬隊が穴を埋めるといった部隊運用です。ここから分隊したり、合流したりと戦術の幅も広がるようです（作者の力量じゃ文章表現ムリデスネ！）

弩：はわわが開発するまでは威力も射程もあるが、連射性が残念だったやつです……。

長弓：歩兵が使っていた弓ですねー、将が使っていたものもこれです  
ね。

短弓：騎兵が主に用いた弓です。白馬義従もこれを使っていたよう  
です。連射性に優れ、矢継ぎ早に繰り出すと考えると頂ければ幸いか  
も？

戦槌：メイス！これのためだけに小説作成したなんて言えない・・・  
（笑）即死性はないのですが、甲冑の上からでも打撲・骨折させる  
武器です。正直、どの時代も負傷者が戦時で最も厄介といえれば厄介  
ですからね。いつになったらメイス出せるだろうか（泣

とりまこんな感じです！陣形とかもかけていけるといいのですが、  
陣形とか厨二乙ですね、わかりません。二次創作書いてる時点d（  
ry

設定集 5 / 3 1 追加（後書き）

まあ問題ないと思います！

ユニーク150！

本当にありがとうございます（涙

次の更新は金曜予定です。（あくまで未定

## 第2話 休暇だったんですがね（前書き）

活動報告に詳しい言い訳が・・・つく・・・ごめんなさいorz

## 第2話 休暇だったんですがね

あれから数日たって、超雲も兵との連動ができるようになっていった。それは賊に対して退ける力をより強くしたと同時に、いつか超雲が抜けた際の損失も大きくなっていく。将軍事情を考えたら頭の痛い問題であった。

また最近は黄巾党の動きも活発になり出撃も多く……

頭痛がひどいですね

子龍殿も東に入れると喧しいですし

「逃げたい」

と、独り言をつぶやく毎日の郭礼です。ついに休めと伯珪様に言われて町で散歩しているんですがね。街も地味に発展してきました、正直言えば地味は素晴らしいものです！悪くない政治、著しくよく改善なんて人が求めると？それよりも平穩が一番だと私は考えています。まあ頭花畑の某馬鹿や、我儘甘味姫とかが酷い部類なんです  
がねえ……

「……に……し……い！」

「だ……、手……。。。」

騒がしいですね、周りが固まっているじゃないですか。

「そこ！静かにできないのですか！？周りを見なさいっ」

怒鳴られた兵士の一人が目を見張る。

「郭礼様！訓練のお時間では？」

「休みですよ、なんですか？休んじやいけませんか？私も人なんですから休みはします。で、そちらのかたはどなたですか？」

兵士と言いつついた一行に目を向ける。そのうち一人が

「劉備玄德と申します！右にるのが「関羽です」、左にるのが「鈴々は鈴々なのだ！」張飛っていう子です。で後ろに控えてるのが私たちのご主人さまである一刀さんですっ！」

「ほお、私は軍師をしている郭礼と申します。で、こちらには何用で？」

「それが黄巾党討伐をにかけて各所で義勇軍集いながら来たのですが、何分運営に困りまして・・・桃花様のご学友であられる公孫賛どのにお願いがあつて着た次第です。」

関羽が答えた。

「なるほど、では手続きを踏んでください。兵士たちにもそう言われたのでしょうか？早ければ3日ほどで会談できると思いますが？」

「三日なんて！もう色々と底がついてて待てないんです・・・」

「そういうことなんだ、お願いだから助けると思つて公孫賛つて人に会わせてくれないか？この通りだ！」

一刀と呼ばれる男の一言と同時に一行が頭を下げてきたが

この時代、太守に対して学友だからとまして”食糧がないような時代？でたかりにくるのは礼儀に反する。いや、どんな時代であつてもか・・・

礼はすべてにおいて繋がり、軍も外交も政治も礼により始まり、礼

に終わる。これは私の持論です、私の才を買ってくださった伯珪様には感謝していますし、私の非常識な訓練に付き合ってくださいる兵士みなさんには訓練終りにお礼を言っています。礼は基本であり、基礎。なのにこいつらは・・・

周りの兵士も郭礼の人格を知っているからこそ劉備たちの行いに対して郭礼が怒気を募らせるのもわかっていた、だからこそ苦笑を呈していた。

劉備一行は周りの苦笑の意味も、郭礼のいい笑顔の意味もわからず

一言ってしまったー

「腹減ったな・・・頼む！会わせてくれないか？そうすれb」「ご主人様！！」「え？」

「お帰りください、もしもどうしても会いたければ手続きを通すことです。ね。ちなみに後ろの人たちですが、手続きが済むまでは街には入れさせませんよ？何されるか分かりませんからね、なに・・・。たった三日食わずともなんとかなるでしょう。では『郭礼さま！』ん？なんですか？」

走ってきた兵士に遮られた。報告は

「超雲殿が単騎にて賊を退治しに向かわれました！公孫釐様から至急救援にむかうようにと！」

へ？

## 第2話 休暇だったんですがね（後書き）

ハイ、カクレイデス。

いやぁ・・・更新遅れたくせに何か色々崩壊気味で…泣きたい。

### 第3話 莫迦ですね（前書き）

残酷な描写あり

そこまでもないとおもいますが

### 第3話 莫迦ですね

「門番！警鐘三回、その後銅鑼を二回鳴らしてください！それと武器庫解放を、あと伯珪様に伏馬隊が出るとお願いします。」

単騎で賊に？莫迦なのか…とはいえお客人を死なせるのは頂けませんね。今緊急事態と伏馬隊の出撃を指示しましたので、すぐにくるでしょう。

思考しながら、城壁の上まで走る。場所とそこまで行く時間、それに最適な編成を構築していく。

「郭礼様、賊は砂が巻き上がってるのでお分かりだと思いますが、先ほど賊の方角に門番と言いつつ一人が向かいました…」

見張りの兵士からの報告

「一人が二人になっただけです！まあ時間稼ぎぐらいにはなるか…借り作るのは嫌ですがしょうがないですね。確実にいきましょう。賊の数は？」

「千はいないかと」

なら…ん？揃ったみたいですね。さすがに三百でも整列すると壮観です。つてあれ？

「軍師！伏馬隊全員揃いました、指示願います。」

「法權あなたもきたのですか？いい歳なんですから、書類仕事でも…」

「何を言います！緊急事態であればこの爺も行くのは当然でありま

しょう？伏馬隊隊長なのですからなっ」

この爺さんが伏馬隊隊長であり、元將軍。先の私による下克上？で唯一残った人です。有能なんですが…歳なのでいつもは後方で兵站をお願いしてるのです…

「分かりました、壹番隊は半分が盾を残りは騎馬、貳参番隊は長弓で！武器庫は解放されてますので駆け足で準備、騎馬の武装は常備剣でいいのですねにいけるように。準備終わり次第、外で整列を。

爺はこちらに」

『ハッ』

爺を呼び出す。

多分武装から予想ついてそうだけど

「法權は盾隊を指揮、莫迦二人が時間稼ぎしてるようですがあの数で保たないでしょうから、そこを弓で殲滅します。貴方の役目は二人を囲み盾で円陣組んでください。隙間は死体で埋めるように。辛い役目ですがいいですか？」

「合図は鎗矢でいいですか？」

察しがよくて助かりますね。

「はい、では行きましょうか」

関羽 side

突っ張られた私たちは頭が真っ白になっていた。

ご主人様もこちらが頼む側ということをもう少し理解してほしいところだった…

そんなとき

「超雲殿が単騎にて賊を退治しに向かわれました！公孫賛様から至急救援にむかうようにと！」

賊がでた？賊！？

「桃花さま！私は討伐に向かいます。ご主人様と一緒に手続きにいつてもらえませんか？」

「え？ あっうん！わかったよ、愛紗ちゃん！」

よし、鈴々は

「鈴々はここで護衛を頼む。」

「わかったのだ！」

「では、いつて参ります！」

砂埃が立っている方向へただただ走った。

その先では一人奮闘する趙雲がいた。賊の中心で槍を振り回して牽制しつつ着実に賊を殺していく。

しかし、趙雲も人の子．．着実に体力を減らし、傷ついた体から流れる血で容赦なく力を失くしていく。

「はあああああああああ！？」

そこへ空気を切り裂く轟音とともに一閃

「我が名は関羽雲長！恐れるものは退けっ、死にたいものは前へ出よ！」

「お助け感謝する！我が名は趙雲子龍、常山の昇り竜。」

中々の技量、さすがは賊の中に単騎で突っ込むだけのことはある。

「趙雲っ、まだやれるか？」

「っふ、甘く、みる、なっ！」

二人は声を掛け合いながら、突き、斬り飛ばしていく。そこへ銅鑼が響くと同時に何かが二人へ近づいてきた。大盾とともに

「そこの一嬢ちゃんたち！しゃがめえええええっ。全隊っ円陣！盾で囲めっ」

「了解！隊長っ」

有無を言わさぬ声で反射的にしゃがんでしまった、後ろの趙雲も同様のようだ。

隊長と呼ばれるお爺さんの指示で私たちの周りを盾で囲んでいく、四方と上を。

「周りの死体で隙間を埋めよっ、特に上部には気を払え！」

その言葉とともに周りの兵士が死体を自分の傍あるいは前へとならべていく。

なんだこれは？酷いものだど斬って隙間に埋めていくぞ？うう・・・

「法樞殿！賊とはいえ死んだ者にそのような仕打ちはっ」

「だまれッ、本当はこんなこと指示したくないわい。合図を送るぞ、中央開けよっ」

趙雲が抗議したが、聞かずに法樞というものは矢を放った。

### 第3話 莫迦ですね（後書き）

じつちやああああん!?

てことで爺い登場。あつ爺がヒロインじゃないですよ？  
そんなこと言ったら石なげらr(ry

え？クオリティ下がってる？ 元々低いんだから気にしたら負けかななんて・・・

一応十話ほど投稿したら一度全体的に修正入れる予定です。

ユニークPV800突破！感謝感謝

PV3000だそうで・・・感涙で前がっ

感想まっています。

#### 第4話 戦いとは悲しいものですね（前書き）

お待ちしました！いや、待ってないよ・・・とか言われそうです  
がorz

## 第4話 戦いとは悲しいものですね

「放てえっ」

号令と共に騎馬隊の後ろにいる弓隊一列目から矢が放たれる。続いて二列目三列目、そして一列目と続き計六回放たれた。賊から見ればたまったものではない。元を辿れば農民であって甲冑はおろか盾すらないのである。

残ったのは四百ぐらいですかね？戦えるのはもっと少ないでしょうが…

円陣組んだ時点で怪しんで逃げればいいものを…頭に血が昇って視野が狭くなっただってことでしょうね。とりあえず

「騎馬隊は追い討ちを！弓隊は斉射後、抜剣。息の根を刺しなさい、いいですね？あっ忘れてました…矢が地についたら銅鑼一回鳴らしてください」

ふう、さて私も行きますか

剣は苦手なんですけどね、狂乱状態の敵なら大丈夫でしょう。それに爺が大暴れしてるからなあ

ところかわって法權は

「よし、開けえええええ。負傷したものは中央に、それ以外は残党を処理せよ！」

いやはや、郭礼様もやりすぎだわい  
薄い鉄と木の二重盾だから盾は平気なのだが、やはり隙間が問題か  
のお

帰ったら財政みつつ改良するように郭礼様いつかの

円陣に展開していた部隊が押し開くように変わり、盾を武器に殴り  
ちぎっていく。そこへ騎馬隊が乱入し、賊は混乱を極めた  
逃走する賊は騎馬隊が追い討ちをかけ、残党は歩兵が虱潰しにトド  
メを刺していく

そのなか郭礼は敵の攻撃をかわしながら法權へと駆けていった…  
時に避けて防ぎ駆けていく。

爺のことですから平気だと思つのですが、やはり心配はあります。  
それに莫迦二人の「捕縛」もありますからね…  
っと、危ないっ！

「郭礼様！大丈夫ですか？」

「助かりました…爺…いえ、法權」

郭礼が油断し、つけ込まれた凶刃を法權が払いのける。

「郭礼様？戦場で油断は禁物ですよっ」

そうでしたね、とはいえ伏馬隊の兵士並なんですよ？私の武はね  
さすがに「単騎」で死角からの攻撃に対応するのは「難しい」ので  
す。

「助かりました…さて法權 急で悪いですが莫迦を二人捕縛してく  
ださい。罪状は超雲殿が軍規無視、関羽殿は…騒乱で大丈夫でしょ  
う。そのまま伯珪様の下へ急行し指示を仰いでください。」

「かしこまりました。」

さて大人しく帰ってくればいいのですが

法權が数人の部下とともに囲み、槍と盾で近づきながらも捕縛を成功させていた。両名ともに自分がやらなければとおもっていたためかこの状況に放心していた。特に趙雲は客将仕えていたからこそ公孫贇軍の現状を知っていたからこそ、圧倒的な精兵をみて啞然となった。

「ばかな……このような精兵見たことないぞ!!」

「これはの……郭礼様直属の部隊じゃ。そなたは東は入れないからしかたないだよ。さて、大人しく付いてくるならばそれなりの応対をするが如何する？」

「「わかり申した。」」

こうして、両名と法權は州府へと戻っていった。そのとき郭礼は

「ここに死体を集めよ！参番隊は木を拾いに、壱番隊は収集作業に、貳番隊は負傷兵の応急処置を頼む！」

見せしめというのもありますが、やはりこうしないと病魔が近隣の村を襲うことがあるというのが怖いので私が指揮するときは必ずこのようにしています。

骨だけになったら、木へ吊るし県境の賊除けとすることなどとやることが多いですが、先に

「全隊一旦作業中断。我々の不徳でこんなにも賊にしまったこ

と、そして犠牲を出してしまったことを胸に刻み黙祷！．．．．．  
・よし、燃やしてください」

本当にままならない世の中です。黄巾．．．．．これから荒れそう  
ですね。

伯珪様がご無事であればよいのですが．．．  
白蓮が無事であれば．．．．

#### 第4話 戦いとは悲しいものですね（後書き）

てことで戦闘シーン？

いや、どうだろう・・・微妙だなあ

やっぱり会話減らして描写増やすべきなのか。

初っ端からスランプとかわらえない。

報告

とりあえず第1部のプロット終了です。朝と夕方電車の中でがっつり書いていこうかなと思います。

と・・・タイトル決定！

## 第5話 悲しいですね（前書き）

感想頂いた誤字などですが…PCが不調なんで若干修正が遅れます  
！申し訳ございません！

ということで初の完全携帯投稿です

## 第5話 悲しいですね

賊を殲滅した郭礼と伏馬隊は啄群へと戻っていった。皆の顔には憂いがあり、その足は重く暗い雰囲気が漂っていた…

それは、賊は倒すべき相手であるが成らざる得ない状況を作り出したのは自分であるとの郭礼の言葉に隊員は隊の力が賊に対して抑止力になればと常に考えていたからである。そんな中、郭礼たちは啄群へとたどり着いた。

「伏馬隊だ！開門！」

門が開いた先には

「郭礼さまお疲れさまです！」

「伏馬隊だぞ！はいりてええ」

「ぐんしさま、いつもありがとう」

「郭礼さま！」

「伏馬隊！」

先には暖かい声援が待っていた…

これは…嬉しいですね

声援のためにいつも討伐に出てるわけではないですが、この声援を聞く度にまだまだやるべきことはあるんだと思い知らされる…まだまだ護るべきものはあるんだと

「ご声援ありがたく！全隊声援に対して敬礼！」

『ハッ』

そこには一系乱れぬ敬礼があつた。郭礼の言葉のこともあるが、何より慣れたくない戦のあとで、この暖かい歓迎は嬉しく感じていた。

「そうだ、法權は今どちらに？」

門番へと聞く。

「法權隊長でしたら、まだ太守さまのところかと思いますが」

ふむ、あれから二刻はたっているのに何故まだ伯珪様のところに？  
何か起こったのでしょうか？何か忘れているような気がするのですが…

とりあえず急ぎますか

「伏馬隊は明日まで休みとします、軍装を解いたら各自自由にして構いません。今度半分に分けて休暇出しますので申し訳ないですが我慢してください」

「気にしないでくださいよ、郭礼さま！」

「休みもらえるだけでもありがたいですよ」

「お前ら！まだ休みじゃないぞ、申し訳ございません郭礼さま」

副長が締めて郭礼へ謝罪を入れるとともに隊員を気をつけた。

「気にしないでください、では急ぎますので後のことはお願いします」

郭礼はそう言い州府へ向かった。

しかし、そこでは元將軍であり現伏馬隊隊長の法權と太守である公孫贇が言い争っていた…そばに劉備一行を連れて…

「話になりませぬ！いかに友であり罪状明らかなものを庇い立てするなどつ、しかも手続きもなしに検査もなしに…ここまで招き入れるなぞ…あつてはならぬことじゃ！」

「爺い、さつきから言ってるじゃないか…桃香たちは私の信頼できる友だから大丈夫だと。それに先ほども民のことを考えての行いで

誉められはすれど責められることではないだろうか？」

広間では法權が怒鳴りつけ、公孫賛が説得をしていた。互いに引かずつとである。

「なあなあ桃香く太守である公孫賛だっけか？がいいって言ったんだから良いんじゃないのか？」

「いいと思うんだけど…あのお爺さんがね…」

「黙らんか！小僧どもがつゝまてつ爺い！」何故ですか！伯珪さまっ」

劉備一行が話そうとすれば法權が怒り、それを公孫賛が諫める。またそんな光景を他人事の如く見つめる関羽と超雲…。広間は騒然と修羅場と化していた。

そんなとき扉から声が轟いた。

「軍師 郭礼只今戻りました 何を言い争って…ふう、伯珪様…入れてしまったのですね？」

予想は出来たが、劉備と天の御使いだからしらが二人が気に入らんなあ

その当然といわんばかりの顔はなんとかならないのか？腹が煮えくり返りそうですね。まあ招いてしまったならしょうがないか…

「招いたのであればしょうがないでしょう…招いたのであれば」

「…私から招いた…」

嘘ですか…ふふ…歓迎でよかった気分がどん底に落とされた感じがすね…。

ままならない人生ですね…

それでも私は「伯珪」様を…

## 第5話 悲しいですね（後書き）

### 四話投稿後

お気に入り登録数 二倍超

PV 一万から三万弱

ユニークPV 一気に千人増加

ど…どういうことだってばよ…

一体なにが…

何はともあれありがとうございます！

ひっそりがんばろうと思います

## 第6話 怒りもしますよ？（前書き）

感想、評価、お気に入りありがとうございます！

PV2万

ユニーク4000突破！

これからもがんばらせていただきます！

サブタイ語尾を ね にできなかった・・・

## 第6話 怒りもしますよ？

「法權下がれ…」

私は法權へ退室を求め、劉備一行を顔を向けた。

「あなた方も下がりなさい。勝手に飛び出た二人は軍規に従い「笙！」…初犯なので多めにみて独牢へ一晩だけ…自分がしたことを思い返すようにいいですか？」

郭礼の物言いに一刀が抗議した。

「太守がいいって言うてるの罰するのかよ！」

「軍法は私預かりでもあるのです、そうですね？伯珪様」

軽い口調の一刀に対して郭礼は切り捨て公孫賛に問い掛けた。対する公孫賛は重苦しく答えた。

「ああ、そうだったな…だがっ…だがも何もありません」つく、済まない桃香…」

何がいけないのか？どこで間違えたのか？こんな弱々しい主は見たことがない…

いない間に何が起きたのか？

いえ、何が起ころうとも太守が配下が誰も預かりしらぬところで罪状の抹消・出所不明の一行を招くなどあつてはならない。これだけは守らせないと示しがつかないっ。

「趙雲殿、関羽殿のご両名はいいですか？」

「今思い返せばかなことをしたと反省しているのですよ、勿論了解いたしました」

「私事です」

「では、外で法權が待機してるでしょうから連れて行ってもらってください、伯珪様はお話がありますので残ってください」

そういつて、公孫賛と郭礼以外は外へと出て行つた。

二人の間に重く昏い空気が流れる。

最初に口を開いたのは意外にも公孫賛であつた。

「壺夜・・・すまないとは思っている。私は太守だ。ここを預かっているものとしての責任がある・・・だが、桃香に出会い話を聞いているうちに私では守りきれないって思うようになってな」

酷く小さい声でぽつ・・・ぽつと話し始めた。

「だって、そうじゃないか？桃香はもう将と呼べる人を二人も自らの力をもつて配下に治めているんだぞ！それに比べ・・・私は壺夜だけだ・・・それに壺夜だって本来は前に出て戦うべき側ではないだろう？」

「そうですね、白蓮様。私は軍師です、本来ならば後ろでふんぞり返つて指示を出しているべきなんでしょう。ですが、私は貴方だからこそ仕えているのです。太守でありながら全てを行い、時には自ら賊の討伐へ・・・それも前線で戦うお姿を知っているからこそ貴方の傍にいます。伏馬隊も私以外であれば白蓮様、貴方一人しか命を下すことはできないでしょう。」

二人は真名で呼び合っている。これは郭礼が他人の前で真名を呼んでもらいたくないという願いから二人っきりの時だけそうしているのである。

「だから私は前に出るのです！例え危険があつても、白蓮様を守れるように前線でも戦えるように訓練しているのです。ただただ・・・守りたいがためなのですよ！だが、その忠誠をこのような形で裏切られたら・・・私はどうしたらいいのです！」

そう軍師に取り入ってくれたあの日から私のすべてはこの方のみだ。

白蓮様を守るために伏馬隊を設立した。これで負担が減らせればと思つて……

「裏切つてなど！！いや……裏切つたのか……桃香はさ私よりずっと凄いんだ。わかつていたんだよ？きつと桃香の言葉でこ啄郡の皆は何人も出ていくだろうつて」

理想論か何かを唱えているのであろうと考えはつく、現実を見てこなかつたからこそ食糧問題などをここまで放置してこれただろう。そんな小娘より白蓮様はもっと凄い、その負担は軽く劉備の何倍もあるだろう。

「……だからこそ、いえ何でもありません。啄郡の人々は貴方のことを分かつております。それに伏馬隊のこともありますから劉備についていくものはいないでしょう」

「どうしてそんなことが言える！」  
どうしても何も……

「太守やその兵士たちが街の安全を州の安全を守っているからこそ私たちは帰還するときに温かい声で声をかけてくださるんですよ？みなさん……」

その声があるからこそ、私たちは守れるのです。

その声があるからこそ、私たちは戦えるのです。

その声があるからこそ、私たちは帰つてこれるのです。

だから今は泣いてください。

公孫賛が静かに涙を流す。

それは清らかな雨のように郭礼は思えた。

その後

「あつ、それとこれは別なのでちゃんと法權に叱られてくださいね？それと食事は嫌いなもののみ、執務室から用がなく出ることも厳禁ですね、まあ頑張ってください」

落ちていたところからどん底に落とすのは忘れてはならないですよ  
ね？

[illegible]

## 第6話 怒りもしますよ？（後書き）

ここでアンケートを一つ。

活動報告にもありますが

1 文字数を増やして、更新を週1（文字数5000→6000

2 今まで通りの文字数で週三回（文字数1400→1600

どちらがいいでしょうか？携帯で書いてPCでまとめることが多いので作者的には2なのですが見てくださっている方も恐縮ですが多くなってきたのでご希望にあわせていけたらと考えております。

活動報告にコメントか感想の一言で回答頂けたら嬉しいです。  
どうぞよろしくお願いします。

## 第7話 夢みてもいいですよね（前書き）

なんかなあ・・・もしかしたら修正するかもです

## 第7話 夢みてもいいですよ

色々とおあって劉備一行は黄巾党への討伐へ向かうということになった。

そう今は見送りのときである。

「白蓮ちゃん（公孫賛殿・さん）、色々ありがとう！（ございませ）」

「気にするな！ だけど、次からは自分で工面するんだぞ？ 桃香」

「うんっ」

そう・・・劉備たちは幽州の軍糧から3日分の食糧を願い出たのだ。その代わりに郭礼がある約束を取り付けたのだが。さすがの白蓮も見返りなしに提供することは避け、劉備もそれに了承をした。

ふう頭痛の種がいなくなってくれたか

もうなんなんでしょう、東に来るなといえば趙雲殿と一緒に来るわ来るわ・・・

勝負したい？ 寝言は寝ていえと言いたいですね

しかし・・・黄巾党討伐とはね

あの人たちに会うのはあれですが、やはり私も出るべきなんだろうまあだから白蓮の執務室に法權といるんですがね

「考え事かの？ 郭礼殿」

「いえいえ、ちよつとね。では入りましょうか、郭礼、法權！ 今後のご相談があります、入室よろしいでしょうか？」

すると、中から了承の声が上がる。

「はいつていいぞ、で？二人してどうしたんだ？」

白蓮が問う。

「軍備と糧食の準備をお願いします、伏場隊は法權が、軍は私が指揮を執ります。人数はそうですね・・・1500人はほしいです。それと伏場隊の計1800人をお願いします」

「わしからは・・・そうじゃの、盾を新調してほしいのじゃが無理かの？」

先の討伐で盾の性能実験も兼ねていたんだが、予定より多くの矢により損耗が激しかったのである。

そういうこともあり、郭礼が苦笑してそれを白蓮が睨んだ。

「その馬鹿に出させるといいたいけど・・・しょうがない新調はわかったけど黄巾党だろ？さすがに間に合わないぞ？」

白蓮がそれは無理だという。

ああそういえばそうだったな、いや・・・あの時はしょうがないですよ？緊急事態でしたし、本当は盾なんて使わずに殲滅予定でしたよ？

ですが、黄巾党討伐では基本的に攻撃に回る予定なので今までのでもいいと思うんですよ

「つと、郭礼殿が百面相しておるが勿論後で構わんぞ？郭礼殿が育てた我が隊・・・そこらの賊ごときには負けるつもりはないっ！」  
叫ぶように、そして誰もが羨望するような風格がそこにあった。

私には出せない風格ですね、さすがは元將軍

私は私の戦い方がありますが

「よし、では二人は準備を進めてくれ！5日後に出立、笙は私の代理としてだから必ず諸侯と顔合わせをすること！よろしく頼むぞ？」

「ハッ」

まあ獅子奮迅、一騎当千とまではいかないけど千騎当千ぐらいの活躍はがんばりましょうかね？

堅実に

確実に

無傷での勝利報告がしたいものですね。

## 第7話 夢みてもいいですよね（後書き）

アンケート結果 2が1票

以上

ふふ・・・まあわかってました・・・

まあのんびり書いていこうと思います。

次回ついに諸侯&戦闘！

## 第8話 曹操殿ですね（前書き）

若干原作から外れます。

苦手な方は戻って！

## 第8話 曹操殿ですね

いやはや、何でこんなに暑苦しいのか  
爺のせいですね

分かります

癒やしが欲しい…目の保養がしたい…  
んっ(…)

あれは曹操殿の軍ですかね？

ならば挨拶に向かわなくては。

「郭、法、伏の旗…あれは郭礼と伏馬隊です、華琳様。」

「誰かしら？」

「公孫賛の軍の要、郭礼直属の隊である伏馬隊は精強だと聞きます、  
郭礼自身も私に比べたら小物ですが…巧いと噂では聞いております」  
荀イクが男に高評価したことに辺りは静まり返った。  
あの荀イクがそう評価したのである…

伏馬隊…伏した…いや臥した馬ね

面白いじゃない

「その郭礼という男を連れてきてくれるかしら？秋蘭…使いをお願い  
い」

「御意…華琳さま」

どんな男か楽しみね。  
それにしても…

「ところで桂花。何故そんなに詳しくったのかしら？」

そう

気になるのは

桂花が男のことを

覚えていたって点

「それは…バカのもとにいたときに噂に聞いたのです。

曰わく、將軍を全てなぎ倒した

曰わく、軍略において比類なきものである

などと…優男と聞いていますので、前者は間違いかと存じます。が、後者は事実でしょう…実際ここ最近幽州は潤っております、行商人も安全に行くことができる」と

華琳が知らず、桂花も曖昧にしか覚えていなかったのには理由がある。

それは郭礼が「無名」であつたこと…

たしかに「幽州」内では何度も活躍している郭礼であるが、その実は幽州から一步も出ていない

それがどう関係するのか？

名を広めるには通常対外交渉や戦闘によつて少しずつ浸透していくものであつて自分の土地で有名であつても他人の土地では、意味が違ってくる…

そして、まるでわざと名を広めなかったような郭礼に対して曹操は興味を持った。

どんな男なのか

どんな才なのか

あつてみないと分からないけど期待しておこうかしら？

丁度そのとき秋蘭と郭礼が到着した。

「幽州太守 公孫賛の代理 郭筭…ご招待により只今到着致しました、入室してもよろしいでしょうか？」

「いいわよ」

返事が聞こえる…多分曹操殿でしょうね

まさか招かれるとは…

扉を開けた先には

清々しいまでの威圧

嫌悪感だだもれな視線

…帰りたい

帰って寝たいです…白蓮さま…

そんな考えを見通したのか曹操が切り出す。

「帰りたいなんて思っていないでしょうね？」

「滅相もない。それで招いて歓談とは状況的に考えららないのです  
が…何をすればよろしいので？」

「ふふ…要件は一つ、ここらの黄巾党を殲滅するのに強力してくれないかしら？相手は10000…そちらにとってはいい話だと思うけど？」

曹操の提案に対して、郭礼は表情を固くした。話が美味すぎるのである…

「…条件は？」

食らいつかなかった郭礼に対して曹操が淡く微笑んで応える。

「話が早くて助かるわ、今立てこもってる賊だけど正面門以外は堀と崖に囲まれて困ってるのよ…主格を捕まえないと終われないし、私たちはここで消耗するわけには行かないの…で、手柄はあげるから門を突破してくれないかしら？突破すれば後は引いてかまわないわ」

「突破…破壊工作ですか、急ぎますよね？」

「ええ」

門…崖…堀…時間がないか…

門を破るのは…被害が大きい

堀はどうにもならんか…

なら崖か

「崖の上には木が生えていましたよね…」

「そうね」

「なら、明日の朝方に賊を外へと追い出しましょう、私の軍が前線も続行しますので手柄の割合を増やしてもらえませんか？」

崖の上に木が生えているんだ。

それに伏馬隊がいればやれないことはない。

あとは出てきた賊を1500人でどう対処するかは私次第ですね

郭礼は微笑んで

曹操は驚く

そして

荀イクの頬が上がった

## 第8話 曹操殿ですね（後書き）

更新遅くなって申し訳御座いません！

書いては消すの連続でした…

しかも更新遅れた割には質が（。 。 ;）

感想お待ちしてます！

## 第9話 統合部隊ですね

あれから半刻、曹操殿といくつか決めごとをして、陣を構え準備を行っていた。

決めごととは

一つ、ジュンイクを連れていくこと

一つ、曹操軍より矢を頂戴する

一つ、曹操軍は敵が出てくるまで動かない

一つ、手柄は半々とする

以上4つであるが、一番目はジュンイクどのが行きたいと申し出たらしい・・・細作からの情報では男嫌いとおったのですが、どういうことなのでしょう？

っ！？

もしや・・・

私が男に見えないとでもっ！！！！

いや・・・ないですよ、いや・・・まあ顔も多少女顔ですが・・・一応これでも力もあるし、でも女性の方も力あるし

うん気にしないほうがいいですね。

「で、片翼のない鶴翼なんて組んでどうするつもり？華琳様は動かないと決めたら動かずに見捨てるわよ？」

「まあそうでしょうね、話してみてもそれぐらいまでなら気付いてました。貴方が私の手管を見に来たのも気付いているつもりです。まあ陣の理由は後々・・・」

爺たちも今頃、崖の下ですかね

合図待ちでしょうから、そろそろ・・・

「合図鳴らせッ！これより一刻はのりくらり「ちよつと！！！」」  
静かに・・・のりくらりとやり過ぎします。負傷者は中央後曲まで撤退基本的弓で牽制のみに徹してください！楽歌隊は銅鑼を鳴らし続けるように伝えてください。では、各部通達後、中央が前進したのち作戦実行をお願いします」

そう私が取ったのは時間稼ぎ

序盤戦での目標は伏馬隊の精鋭部隊が崖の上へ到着と木を切り倒して丸太を作り上げること。この2つに尽きる。

そのためには精鋭部隊が崖に登り、木を切り落とすために注意をこちらに向ける必要があるってこと。そのために楽歌隊に音を鳴らさせて、左翼と嘴で弓矢による牽制攻撃。相手は所詮賊・・・聴覚・視覚両方で何か異常を感知すればそちらに目が行くでしょうからね。

その後、幽州軍は郭礼の指揮のもと、長弓による牽制射撃と後退を繰り返していた。

その姿を見て、ジュンイクは疑問が解消されていた。

・崖

- ・片翼がない
- ・銅鑼の音
- ・時間稼ぎ

ここまでくれば、大体の人はわかるだろう。

それも曹操に認められた才女であればなおさらに…である。

「あんた・・・まさか火計でもするつもり？」

「む・・・気付きましたか、まあ火計はあくまで副産物のようなものです。矢を戴いたんですから基本的には矢を用いますよ？ あ、そうそうジュンイク殿は弓ってどう思いますか？」

「矢？弓矢隊による一斉射撃でしょう？あとは・・・そうね火矢による火計か」

まあ普通はそんなものでしょうね

「矢というものは一斉射撃はいいですね。ですが、注目すべきは弓の種類。それに私は弓と言いましたがね、一般的に知られている弓は長弓。曹操殿に戴いた矢は全て長弓用でしたがそれだけでは斉射の間隔が長い・・・ならどうするか、連射性に優れた弓を使えばよいのです」

「短弓はたしか連射性に優れるけど射程が短いわ！例えば間髪なく矢を降り注ぐことができて、弓隊が攻められたら一巻の終わりよ！」

そうですね、だからこそ槍が生きてくるんです。

「槍衾に短槍投、これらによる弓隊の保護。実際はこれに騎馬隊も混ぜるのですが、これが私の基本理念。全てを統合した統合部隊と私はいつております、弓隊を守りつつ敵入口に矢の雨を絶え間なく降らせるのが私の目的なのですよ」

準備は整いましたね。  
さあ始めましょう。

## 第9話 統合部隊ですね（後書き）

ひっぱるなー自分・・・

手が勝手にgggdと・・・（おい

ネギまに関して勉強中

真逆はいつになったら出すことになるんやら…

明日も投稿できるといいな・・・とりあえず今から予約投稿できたらやる予定です。

第10話 貸しですね（前書き）

予約できたかな・・・

## 第10話 貸しですね

陽は沈み

音が止み

急に辺りが静かとなった

その時

真っ赤に燃えた丸太が崖から転がり落ちた。

黄巾党は先ほどまで逃げ腰な郭礼の軍を相手していたため熱が上がっていた。

が

そこに自陣の後方より火計を浴びて、その熱が冷め恐慌状態に陥った。

逃げようとするがそこには門が一つしかあらず、必然的にその門から出ようとするが・・・その先はただの地獄が広がっていた。

ジュンイク side

郭礼とかいう男が気になってついてきたのはいいけど・・・  
なんなのこれ？

いつのまにか来た、300弱の左翼も合わせて両翼がその翼を狭め、矢が門手前へ集中した。

後方に火計を仕掛けるのはわかってたけど、短弓ってこんなに殺傷力高かったかしら？

それにしても酷い戦ね

恐慌状態で門に迫ったまではないが、そこには死体の山。

自然的に後から来るものは足止めを食らい、そのまま将棋倒しで圧死か

どこまで考えていたのか

「右翼の間隔長いぞ！伝令飛ばせっ！！ 伝令ッ、左翼に通達・・・ 斉射が終わり次第、残党狩りをおこなうようにと伝えてッ」

あくまで完全な殲滅を選んだこの男

覇を唱える華琳さまに近しい何かを感じている・・・？

私が男に・・・？

あいつ・・・

郭礼ってどんな男なんだろう・・・

大体は片がついたか。

「さてジュンイク殿？」

「ヘッ！？」

へ？

「どうか為さいましたか？あとは伏馬が殲滅するのみですし、私は最後の指示を出しましたので、曹操殿に報告へいきませんか？」

「ええ・・・ええ行きましよう！！さきに行くわ！」  
「え・・・ちよつと危ないですよ！」

避けられてる！？

なんで！

え・・・なんかしたっけ？私・・・

さっきのやり方が酷すぎたとか？

たしかに圧死は見るものではないですが、ここからじゃ目視なんて  
できませんからね

何をしてしまったんでしょうか

郭礼が思案顔をしつつ百面相をしているが、実はジュンイクが照れ  
いたというのが真相であった。

などともうでもいい会話をしつつ、二人は曹操の陣営とたどり着い  
た。

さて、本題はここからか

「郭礼、ご相談とご報告があります。曹操殿にお目通しをお願いし  
てもよろしいでしょうか？」

「入っていいわよ」

「では、失礼して・・・黄巾党討伐完了しました。あとは残党狩り  
ですが、ほぼ殲滅ですので時間の問題かと存じ上げます。なお、矢  
ありがとうございます」

「で、わたしたちは何も出来なかったのけれど手柄は半々でいいの  
かしら？なんなら、全てそちらさんでもいいのけれど？」

予想通りといったところですか

「いえいえ、助力があつたのはたしかですので半々でお願いします。

で、気に食わないというのなら貸し一つということはどうでしょう？あくまで私にであり、幽州にはないです」

「へえ」

曹操がジュンイクをちらりと見る。

「いいわ、貸し一つで。それに黄巾党がこの先で大規模に集合しているという情報が入ってるからご一緒しない？疲労しているでしょうから面倒ぐらい見るわよ？」

よし、当初の目的は達成ですかね

それに面倒も見てくれると・・・なんかありそうですが兵のことを考えればありがたいですね。

「それで貸し借りなしなんてことはありませんよね？」

「そのような姑息なことすると思つて？」

「いえ、まったく。では、お言葉に甘えて道中お世話になります」

なんかあやしいけど、逆らうと怖そうですからね・・・

これが覇を唱えし者か

こんな風になれたらどれほど良かったか

## 第10話 貸しですね（後書き）

前話含めて、いつものPCじゃないのでジュンイクの文字がでない・  
・うう・・・；w；

読んでいただきありがとうございます！  
引き続き頑張っていきたいと思います。

にしても迷走してるなあ

## 第11話 狂気ですね（前書き）

遅くなりました

お忘れの方も多いでしょう！

なんか凄く他の先生方の作品が面白すぎる…

←

読んでばっかでした、ごめんなさいorz

残酷な描写あり苦手な方は戻るで

## 第11話 狂気ですね

「郭礼殿、このままでもよろしいので？」

法權が質問を投げかけた。

曹操と共に行動していいのか？という意味だ。勿論、答えはいいえである。確かにここで官軍と協力するのもいいが幽州に將軍や軍師が長期不在となると話は違う。幽州は現状弱小である。

曹操に出会い、公孫賛ではこれから起こる嵐に耐えられないことは二人とも気づいてはいた。そうならないために幽州各地で様々な仕掛けを巡らし、警戒網連絡網に関しては各地の中でも特出している。しかし、どんなに策を張り巡らせてもあくまで郭礼は軍師であつて、乱世でどう生きるかは公孫賛次第。

「そうですね…私は戻るべきなのでしょう。ですが、法權あなたは残るように」

「わかりましたぞ」

このまま州軍は法權と共に行ってもらい私は伏馬隊と幽州に帰り乱世に備える。

あるじ主には覚悟を決めてもらう。

私も覚悟を決めよう。

必ず 白蓮 だけ は生き残らせて見せる。

例え袁昭が攻めてこようとも。

それから日時が経ち、袁昭から檄文が公孫賛の元へと届いた。

「暴君董卓を討伐するために反董卓連合に参加せよですか」

「そういうことだ。参加しなければ取り残されるからな…参加するつもりなのだが、笙はどう思う？」

部屋には郭礼と公孫賛の二人だけだが、そこは軍師と主。甘い雰囲気など醸し出さず真剣な顔をして話し合っている様子が伺える。やがて、考え込んだ郭礼が口を開く。

「好機と観るべきなんだろうが、法權を置いていきましょう。まだ”完全”ではないのです」

「將軍なしでどうするんだ？私でもいいが、全てを面倒見切れないぞ？」

まったく何を言っておられるのか

「ここに軍師が居るでしょう？」

あれですか？

私は軍師じゃないとでも？

なぐんで、言えるはずがないのですが

頼りにされないというのは男としてどうなのかと考えてしまいますね

しかし、私が率いるとなると州軍への指示の連絡不備が起こる可能性があり、伯珪様のことを考えれば側にいたほうが良いに決まっているんだが・・・

「ああ、考え込んでるところ悪いんだけど笙じゃ何かこう・・・迫力ないじゃない？」

「……………伯珪さま……………ちょっと厠に行つて参ります……………」

あれ・・・？私地雷踏んだ？

え？でも、こう可愛い系の笙じゃ実際迫力ないから圧倒できるかといえは出来ないと思うんだけど、間違ってるないよね！！だってさ、桃香が「私！怖い顔するんだ！」っていつてるようなもんだよ・・・

「伯珪殿、お邪魔するぞい。先ほど暗い顔した郭礼殿が走り去って言ったのだがどうしたのじゃ？」

法權のお爺がきた。ともかく説明したら怒られましたが・・・

「確かに郭礼殿に迫力はありませんが、威厳が御座いますぞ？はつきり申し上げるとすれば伏馬隊は伯珪殿でなく郭礼殿に畏敬を感じ此処におるのです。」

「む！私がいなくてもいいってことか？どうせ影うすいですよーだ」  
「そういうことでは御座らん。郭礼殿が伯珪様に尽くす姿に我々は畏敬を感じているのであつて、曹操殿や劉備の小娘に尽くす郭礼殿であれば私たちは見捨てていますぞ？お二人が共にあるからこそ私たちは此処にいる。それだけは覚えてほしいの。」

それに郭礼殿は

怒ると怖いからの

そういう意味では迫力抜群

おもつのだが、どうじゃろう？郭礼殿？」

つぶ、味な真似をしてくれますね

「そうですね、あとで伯珪様とゆつつつくり話すとして、今は話を進めましょう。法權！貴方は幽州に残り準備を進めてください。期限は反董卓連合が解散するまでです、いいですね？」

「ハッ」

法權がいれば何とかはなるでしょう。  
で、本題の連合ですが

「連合に関しては戦槌部隊を表に出してみてはいかがでしょう？あわよくば敵将の首を挙げて名を高めましょう。今後のためにも」

「しかし！？あれは・・・お前が隠してきたものじゃないか！」

隠してきました  
が

いつか使わなくては錆びてしまいます

兵だって武器だって既に戦を求めている  
現状、放置するのはよろしくない

「兵が飢えております。私の方法が悪かったのもありますが、お察してください・・・」

戦槌…

敵を砕き、意識をもぎ取るための武器

血が出難いが故に相手をどの程度痛めつけば戦意喪失するのか  
明確な基準を求めるために  
私は賊を実験台にした

その結果、生まれたのが凶器溢れる伏馬隊所属 戦槌部隊。

「私の読みが甘かったのが事実です、ですがここで投入しないと不  
味いことになるでしょう、投入許可をお願いしますか・・・？」  
「……………分かった……」

白蓮様を守るには妖にだって魂を売り渡しましょう。  
そして、伏馬隊とともに貴方のために喜んで死にましょう。

## 第11話 狂気ですね（後書き）

実際問題、ヨーロッパであれアジアであれ

昔は罪人はこういう風に扱われることも多々ありました。

そして、斬るではなく殴る。

これも明確にどこにどれだけ殴ればいいのか  
殴る場合の人体の急所どこなのか

そういう意味でも調査を開発家であれば必然と行つのではないか？  
と考えた末の結果です。

一応、賛否両論分かれそうですが様子見で即改訂かどうか決めたい  
と思います。

## 第12話 会議ですね（前書き）

お忘れの方が多いでしょう・・・

間あけたんだから連続投稿だろな！ゴラアとか思われてるかもしれないが・・・ストックほぼありません・・・orz

しかも迷走？中

## 第12話 会議ですね

ああ高笑いが聞こえますね。

馬鹿…いえ莫迦が何かしているんでしょう。入る気失せる場所だなあ…ここは…

「笙、行くぞ」

「わかりました、白珪様」

中に入った瞬間、重い何かが私を包む。

莫迦二人は置いておいて、孫策、曹操この2人から放たれる威圧が重くのしかかるが、そのような素振りを見せずに白珪様に追従すると

「あら、白蓮さんとお付きの方ではありませんか。遅い登場ですわね？」

「すまない、麗羽。少々ごたついていてね…で、外からだだ漏れるほど何を話していたんだ？」

「総大将をだれにするかですわ！」

…ふ…馬鹿だ莫迦だと思っていたがここまでできたか…

周りの空気が冷めましたね。

さて、ここは順当にいきますか。

「白珪様、袁昭殿、発言してもよろしいでしょうか？」

「あら？いいですよ」

「この反董卓連合は元々袁昭殿が檄文を回し集めた集団ならば、袁昭殿が総大将をなされてはいいかがでしょうか？勿論、諸侯が了承するならばですが。また…推薦した身ですので公孫賛軍が先鋒を担いましょう。」

「先鋒の件は私も考えていたことだから、どうだ？麗羽」

元々話をしていた白珪様が合いの手を打ってきて、これを機と曹操も乗ってきた。

「ねえ麗羽、私もそれがいいと思うわ。それに厄介な先鋒まで引き受けるって言うてくれているんだからいい話じゃない？まあ公孫賛のところまでどこまでやれるかは置いておいてね」

「ちょ！？曹操ッ」

「そうですわね！でも白蓮さんところだけでは心もとないですわね、誰か手伝ってくれる方はおりませんか？」

孫策は静観…いや周瑜の指示で静観をしているってところですかね。

あの孫家が助攻であれば、かなり楽にことが運べるのですがそう簡単には行きませんか。残る可能性は貸しのある曹操殿が端であたふたしている劉備一行か。

まあアノ曹操殿がこの機で出てくるわけではないでしょうから、手柄を立てたい劉備一行が出てくるのかな？

「…誰もいませんわね…」

…な…んだと？

手柄ほしくないのか！？と劉備のほうを見るとビクビクした感じの劉備が目に見えた。そういえば前回から一度も目線合わせない理由はこれだったのか。

はあどうしてくれようか？これじゃ単体でやる羽目…いや単体でもいいのか？

「白珪様、ここは私たちだけでどうでしょうか？」

「なっ！？ 笙…血迷ったのか！？」

驚く白珪様と諸侯たち

私はそこで薄く笑っていた。

連合軍とはいえ、手柄に関して各自に立てるが基本である。

つまり将の首を取ったもの、いち早く目標に突入したものが名を得ることができる。

「虎牢関では呂布がいるでしょうから連合軍総出ということになりましょう、ならば…？水関は私らが手柄を頂きたいと考えているのです。勿論勝算はございますよ？かの周喻殿とそこにいる小さな軍師はお気づきのようですがね。？水関に掲げられている旗は華と張の二つ、張遼は賢く強い…戦上手と評判とですが、華雄は強いだけです。強いだけならばどうとでもなる」

直進しか知らぬ猪など軍師にとってただの力モである。

武が呂布の域まで行くと直進だけでも対応が厳しくもなるが華雄であるなら伏馬隊で対応もできる。

そんなことを考えていると

「ちょ…ちょっと待ってください！！」

なにこれかわいいですね…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5231t/>

---

白馬義従 -隊と共に、貴方の傍へ-

2011年9月16日17時28分発行